

私の最も滑稽で最も真剣な作品  
——ザミャーチン

\*なお、第七部以降は、できれば、バツハの「マタイ受難曲」を聴きながら読んでほしい。

二〇三二年、六月十五日、午後三時。

麻暮正作は、郷田邸で養生している。

世界最先端の科学者、川上宙門は、竹馬の友である、世界随一の外科医、キノシタ・ジロー博士を急遽呼び寄せた。

「麻暮正作氏の死は、世界の死だ」

と告げられたキノシタ博士は、ロスアンゼルスからプライベートル・ジェットですっ飛んできた。

キノシタ博士は、父と兄を、麻暮とその手下に殺された。

それを知っていて急遽来日したのは、川上同様キノシタも、麻暮を崇拜していたからである。

ふたりとも、この世界を救うのは、すくなくとも人類壊滅をめざす荒野大三郎の野望を打ち砕くのは、麻暮しかいないと確信していたからである。

じぶんが生還した原因と経過と結果を、郷田狂介から詳しく聞いていた麻暮には、大きなプレッシャーがあった。

いままでは己の問題だけで活動してきたつもりが、奇跡的な生還をしたいまは、それだけではなくなってきた。

つまり、使命が天命になってしまった、そんな感覚に麻暮はとらわれはじめていたのだ。

(ケケケ、こいつはきつい、ボクの思わくとはちがう)

と思いつつも、命を救われた身としては、じぶんの思わくは度外視しなければいかんとも思われた。

しかも、鉄仮面の下は、以前の爛れた醜悪な顔と異なり、あくまでもキノシタ博士の好みで、ずいぶんと若くずいぶんとハンサムになっていた。

ジョン・ウェイン、ゲイリー・クーバー、ハンフリー・ボガード、などなど、懐かしきハリウッド・スターのこった煮になっていたのである。

それが気に入らうと気に入るまいと、

(いまは慣れない麻子のためと、やはり慣れないじぶんのために、鉄仮面を付けてはいるが)

いままでとちがって、素のままでも活動できるというやりやすさはある。

テレビのニュースは連日、大半がAIセックスロボットのニュースで、こんなことは二〇二〇年の新型コロナ騒動以来であろう。

もう麻暮の耳にタコができるばかりになっているが、ほちほち身体も回復してきたので、やるべきことをやらねばならないのだ。

湘南は、いや横浜も横須賀も、いや神奈川全域が、セックスロボットに犯されていた。

男たちは去勢され、または腎虚となり、女たちは生身の男にはまったく興味を喪っていた。

AIセックスロボットが、近日中には、東京に大挙移動するだろうと報道された。

日本政府の対応は、すでに後手後手になっていて、これも新型コロナ騒動と同じであった。

昼寝から覚めた麻子の相手をしつつ、麻暮はしばし思案をしていたが、つと思ひ立って、麻子の手を引いて、郷田の書齋に向かった。

二〇三二年、六月十五日、午後五時。

麻暮正作は、郷田狂介の書齋にいる。

郷田は、麻暮に紅茶を、麻子にジュースを出したのち、

「気持は解りますよ。」

まったく、緊急事態宣言が出てもおかしくはない状況ですからね。

でも、半年の休養が必要と、キノシタ博士によく云われているんです。

あと三か月、ガマンできませんかねえ」

「ううむ、手遅れにならんかなあ。

東京を制圧したら、全国を制圧したも同じって、荒野は考えているはず。

全国を制圧したら、こんどは世界だ」

「ただ最近はどう考えているんです。

核とかで人類壊滅されるよりは、いいんじゃないかと。

いずれ人類は滅びるでしょうから、ぼちぼちいい機会かなと。

それくらい人類は、腐敗していますよ」

「郷田さんがそう云うなら、そうも云えるけれど、ボクは腐敗は政治家や企業家や文化人くらいで、それらの百万倍も貧困者や恵まれないこどもがいる。

目立つ腐敗の陰で、人類は蠢いているんだ。

腐敗とハキダメはちがう。

腐敗のなかには醜い亀しかおらんが、ハキダメにはまちがいなく美しい鶴がいる」

「麻暮さんがそう云うなら、そうなんでしょうが、ハキダメに生きて、生きているって云えるんでしょうか」

「ケケケ、そこが問題だがね。

人間は生きてさえいればいいって、考えもある。

たしかにボクも、世界的なコロナショックのときなんか、これは戦争だ、第三次世界大戦だ、なんて言う文化人に做えば、一度せんぶ破壊されて、何もない戦後の状況から、人間は復活すべきだとも考えたがね。

しかし、郷田さんよ、ちよいと素直になってみたまえ。

コロナウイルスとか、セックスロボットとかに、殲滅されるってのも、癪じゃないかねえ」

「じゃ、じゃ、癪ですか」

「じゃっくりしなくてもいいよ。

じゃっくりで想い出したが、ボクがじゃっくりしたのは、陽羅師匠との会見のときだけだったな。

想えば、師匠は妙なことを云っていたなあ。

地球にサ、でっかいボルトを打ち込んで、向こうまで通して、そのボルトを回転させるんだ。

そう、自転の逆回転。

さすれば、人間の歴史はやりなおすことができる。

ケケケ、荒野よりも奇抜だねえ。

ボクなんか、師匠とちがって、喜怒哀楽の世間に生きてきた人間だから、奇抜な発想や、崇高な思想で考えたことなんかないんだよ。

コンチクショウとか、クソツタレとか、ヤツタルデとか、イマゾイクとか」

「麻暮さん、出番ですよ、ってときには、かならず登場しましたからね」

「国がなんにもしないからだよ。」

今回だって、性的な意味と、経済的な意味と、重ね合わせて、やるきまんまん、おおいにけっこうなんて宣っているんだからね。

目先のことしか考えられない、政治家ばかりなんだ」

「たしかに、セックスロボットを取り締まったら、セックスニングンも取り締まらないといけない。

前者は政治の黒幕が元凶、後者は暴力団が元凶、どちらも政府の庇護者だものね」

「ボクが恐れているのは、セックスにはドラッグがつきものだということさ。

荒野が新ドラッグを開発していたことは、蝶子の状態で判然としている」

「でも、ドラッグは暴力団の資金源だから、荒野大人の企画は、暴力団にとって、死活問題。」

荒野大人と暴力団とを戦わせて、相撃ち殲滅を狙う方法だってあると思いますよ」

「そのことはボクも考えてはいる。

だが、それも手打ち前にやらんと、手遅れになっちゃう。

荒野のことだから、暴力団を手なずけるなんてお手のものさ。

ケケケ、先手必勝がボクのいままでのやりかたよ」

「けれども、ああ、けれども、どんな理由があったにせよ、私は、こんどばかりは、すくなくともしばらくは、登場してほしくない。

忖度しかない日本政府に、遅まきながら、一応の対応はまかせるしかない。

とにかく、ギリギリまで待ってもらいたい。

だって、いまは、キッチンにも立ってない状態じゃありませんか。麻子ちゃんや麻暮さんの信奉者のためにも、イノチを惜しんでもらいたい。

もはや、本人が望むまいと、麻暮さんは、じぶんだけのイノチではなくっているんですよ」

郷田は身振り手振りど、涙目で訴えた。

麻暮は麻暮らしくなく、気圧された。

それだけ郷田の熱気が伝わってきたのである。

それでも麻暮は諦めきれなかった。

「ポアロさんならどう云うかな。

ホームズさんなら、どう対応するかな」

麻暮の言葉に、郷田は珍しく苦笑を浮かべた。

「麻暮さんは、一探偵じゃありませんよ。

そりゃ、私の少年時代は、ポアロやホームズと並ぶ、憧れの名探偵でした。

それがある時期から、もしかすると、世紀の殺人鬼ではないかと思うようになりました。

あるいは、狂気と俠気の怪人。

けれども、いまや、麻暮さんは救世主なんです。

一介の探偵なら、ハメットやチャンドラーの探偵同様に、イノチ知らずでいいんですが」

「ケケケ、しかし、ボクが救世主なのは、たまたまのたまサ。

もしも相手が荒野でなければ、ボクは一介の探偵にすぎない。

世紀の殺人鬼には、決してならなかったネ」

「そういうことが、運命、天命、なんじゃないですかね。

いずれにしても、お願いですから、麻暮さんを復活させてくれ、川上博士やキノシタ博士の、恩を仇で返すことだけはやめてください。

そうして、もし、もしも、どうしても動くのなら、動かざるを得ないのなら、そのときは、必ず私を誘ってください」

郷田が低頭すると、涙がこぼれた。

麻暮は無言で、書齋を出た。

そうして、麻子の手を引いたまま、鵜沼の海岸の方に歩き始めた。

二〇二三年、六月十五日、午後六時。

麻暮は鵜沼海岸を見渡している。

梅雨にはまだ入っていないし、日が落ちるのも遅いので、まだかなり明るい。

水のなかには、海鳥とまちがえそうなほど、無数のサーファーが屯している。

去勢、もしくは腎虚のサーファーたち。

麻子は砂浜で無邪気に遊んでいる。

麻暮は天を仰いだ。

こういうときは、片腕の金助、あるいは師匠の陽羅が、何かのきっかけを与えてくれたものだ。

しかし、片腕はすでに亡く、師匠も亡くなっているに等しい。さて、どうすべきか。

川上やキノシタ以上に恩がある、郷田の言葉に従うしかあるまいが、逆らわずに、なにか手立てはないものか。

思案の末、麻暮は砂浜に枯れ木で円を描き、その円を四つに分けた。

その四つの区分けに、それぞれ簡単な文字を書いた。

それから麻子と呼び、その円のなかに入れた。

麻子がこの四つのスクエアのどこで遊ぶか。

すると麻子はためらうことなく、ひとつのスクエアに入り、そこで砂遊びを始めた。

すぐにその文字は消えたが、そこになにを書いたか、麻暮が知らぬはずはない。

麻暮は麻子の無邪気な様子を眺めながら、

「ボクのエンジェルよ、ボクとオマエの選択を喜んでほしい」とつぶやいた。

ちなみに四つのスクエアに、麻暮はこう書いていた。

一、急いては事をし損じる。

二、急がば廻れ。

三、逃げるが勝ち。

四、いまぞゆく。

麻子と麻暮は、四を選んだのである。

二〇三二年、六月二十二日、午後十時。

麻暮正作は、港区のレインボーブリッジにいる。

麻子を預ける口実として、妻麗子の墓参だと郷田には伝えてい  
る。

ただし、カンの鋭い郷田がそれを信じたかどうかは別だ。

それでも、郷田に覺られないために、郷田の愛車は借りずに、  
ここまではタクシーできた。

この日が梅雨入りである。

雨が落ちそうな空を、虹色ライトアップが照らしている。

東京湾から隅田川へ。

湘南や横浜のセックスロボットが、大挙してこの大橋を渡ると  
の情報が、川上宙門から届いたのである。

その際、川上は、じぶんも行きたいと申し出たが、麻暮は強く  
拒んだ。

麻暮はすでに川上から、特殊兵器を受け取っていたから、当面  
はそれで充分、またいずれ協力要請をする、と伝えたのだ。

このとき、パリのギャバンから、スマホにメールがきた。

「こっちは、「探偵」は死語になっているから、調査事務所と  
しました」

とあった。

「蝶子さんは、こっちの生活にだいふ慣れてきて、ぼくの気持ち  
を解ってくれつつあります」

とあった。

「マドレーヌもカトリーヌも元気で、先生との再会を心待ちにし  
ています」

ともあった。

最後に、

「麻子ちゃんのために、絶対に生き残る方法を考えてください」

とあって、もしかすると、川上から郷田に、郷田からギャバン  
に、こんどのじぶんの動きが、伝わっているのかもしれないと思わ  
れた。

それでも郷田がじぶんを追ってこないのは、麻子を預けているからだと思うと、妙な気分になるのだ。

じぶんは麻子をダシにして、郷田を危険から遠ざけているのだ。  
(そうだ、ギャバンの云うとおりだ)

妙な気分は、別名「覚醒」だった。

(ボクは生き残る、なぜなら、闘いは、まだまだ続くからだ)

二〇三二年、六月二十三日、午前一時。

麻暮はレインボーブリッジの橋桁の上から、下をのぞいている。空は暗黒だが、虹色の光が川面を鮮やかに照らしている。

雨が降ってくる。

そんな表現だけでは足りないかもしれない。

篠突く雨、とむかしの人なら云ったかもしれない。

突然のこの猛然たる雨を、麻暮は、死の付く雨と云いたかった。

東京湾から、墨田川の下流から、浮き上がってくる無数のセックスロボットの大移動、それら一体一体に、麻暮は殺気を感じた。

麻暮は川上宙門作成の特殊兵器を構えた。

それは平凡なピストル型だったが、重量は平凡ではなかった。

両手と腹で支えるのがやっつである。

麻暮に、ためらいは、みじんもなかった。

白く妖しく、なまめかしい、男性用セックスロボットの洪水。

胸が突き出ている、腰がくびれている。

マネキンか、いや、高級ダッチワイフそっくりだ。

浅黒く妖しく、たくましい、女性用セックスロボットも混じっている。

麻暮ならずとも、

(おまえたち同志でやれよ)

と云いたくなるだろう。

セックスロボットの津波は、麻暮の放つ特殊兵器の光線の前に、まるで白アリか白ウジか。

シラミつぶしにつぶされ、ほとんど声もなく音もなく、いや、ほんのかすかな、愛らしいというほかはない悲鳴をあげて、水中に没していった。



そして、一体一体からは、一人一人の人間と同量の血が吹き出した。

麻暮はそれでも、

(こんなはずはない)

と思っていた。

(これほど容易に解決するはずはない)

二〇三二年、六月二十三日、午前一時半。

郷田狂介は、書斎で眠れずにいる。

麻子を眠らせてから、五時間、ひたすらパソコンの前に坐りつづけている。

原稿は進まない。

麻暮の動きは、とっくに川上から一報が入っている。

しかし麻子を置きっぱなしにして、駆けつけることもできない。

忸怩たる思いが、ずっとなつづいていた。

その思いは、思いの外、郷田を打ちのめしていた。

郷田は金縛りにあった人と同じであった。

長いあいだ呆然自失していた郷田は、それでもようやく我にかえて、静かにキーボードを打ちはじめた。

いまのじぶんの心境を、いや、麻暮の心境をじぶんのものとして、詩らしきものに見てみたのである。

### 【寒心】

こうしてわれらはまたも孤独だ

(セリーヌ)

寒心とは関心でも感心でもない  
心配などで肝を冷やすこととか  
怖れを抱いて慄然とすることか  
歓心に堪えないとは云わないが  
寒心に堪えないとは云うもので  
昨今いよいよ尿漏れがひどくなり

近々いやはや失禁男の札貼られ  
これは異状だ癌の可能性大です  
而も末期まっきっきの黄色信号  
なんて医者に大仰に云われると  
やはり寒心に堪えないけれども  
肝を冷やして治るものではない  
治すには治療か手術かそれとも  
つまり放射線か全摘かそれとも  
この際胡散臭い祈祷でも頼むか  
或いは新興宗教に縋ってみるか  
若しくは自力本願念力発揮だあ  
今こそ綴ろう私的前立腺歌日記  
くたばれ瀕尿尿漏れ後追い漏れ  
いやいやそんなことをする前に  
医者 of 誤診を疑ってみることか  
そうして誤診でないと解ったら  
観念して死期を待てばいいので  
待てば海路の日和ありうんぬん  
むかしの人はよく云ったものだ  
荒れ狂う海を知っている身には  
日和なんていまここにしかない  
待たなくてもいまこの日和よ  
例え雨でも雪でも嵐なんかでも  
例え重病でも金欠病であっても  
それを愉しめれば人生充分かと  
生まれた甲斐があると云うもの  
それ以外に生まれた甲斐はない  
甲斐があれば死出の旅も無寒心  
畜生め天国も地獄もあるものか  
棺桶も死骸も墳墓も仏壇も砕き  
再び異次元の世界へと逝くのみ  
そこに関心を持つのも悪くない  
そこに寒心を抱くのも仕方ない  
馬鹿な宿命を詛うのも悪くない

人間万事塞翁が馬鹿とか何とか  
人間の吉凶禍福は予兆できない  
なぜならそんな差別はないから  
人間すべからく凶と禍しかない  
ゆえに馬鹿な面白さが在るので  
馬鹿馬鹿しいにもほどがあるよ  
われらの世界は愚者愚者の葬列  
われらの死はなしくずしの愚劣  
おお独りを愉しめ愉しむは独り  
おお独りこそ原初からのすがた  
孤絶の石ころになにができよう  
孤絶の石ころになにができよう  
ならばなにを怖れるなにを寒心  
またも孤独ではなくいつも孤独  
三度の飯と変るものなんかない  
六度の熱と替るものなんかない  
九度の嘘と代るものなんかない  
畜生め天国も地獄もあるものか  
棺桶も死骸も墳墓も仏壇も砕き  
再び異次元の世界へと逝くのみ  
粉雪が今日は降りつついている  
かつて今日は粉雪が降ったのだ  
そして明日も粉雪が降るだろう  
降る雪や明治は遠くなりにつけり  
明治大正昭和平成令和に拘らず  
寒心はいつも降りつついている  
都会に田舎に山に海に平野にも  
おお自然よそなたがもし神なら  
そなたは無神論者になるだろう  
おお神よ人間から寒心を抜取れ  
それとも魂を抜取るべきなのか  
だれかが云ったが孤独こそ故郷  
おお魂の故郷はそこにしかない  
ならば流石の神でも手が出せぬ

だから天国も地獄もあるものかわれらの世界は愚者愚者の葬列われらの死はなしくずしの愚劣孤絶の石ころ転がって生きつつ孤絶の石ころ転がって死につつ

二〇三二年、六月二十三日、午前三時。

麻暮正作は、レインボーブリッジの橋桁の上に屹立し、相変わらず特殊兵器をぶっ放している。

一千、いや一万のセックスロボットが、すでに破壊されたはずである。

それでも、麻暮が、

(くそっ、ウジ虫め)

と叫ぶほど、次から次へと水面上に這い出してくる。

麻暮にシラミつぶしにつぶされても、まるでそいつらが水面下で復活して、せりあがってくる感じ。

つぶしたセックスロボットは、それこそ氷山の一角ではないかと、麻暮は危惧しはじめている。

この特殊兵器だって、そのうち限界がくるはずだ。

(ケケケ、なるようになれだ)

麻暮は、限界を怖れずに射撃をつづけた。

色仕掛けで助かるうとする奴や、飛び上がって空中を舞い、麻暮に喰らいつこうとする奴や、破壊されたあとも、性器だけで生き残ろうとする奴などもいたが、構わずに木っ端みじんにした。

そこまでやると、さすがに、勢いは弱まってきた気がする。

麻暮はいったん射撃をやめ、様子を窺った。

すると、ちょうどそのとき、水面下から、なにやらビルらしき巨大な物体がせり上がってきた。

(な、なんじゃこれは)

愕然としたのは、一瞬にすぎなかった。

こういう奴が出てきそうな予感があったのだ。

むかし映画の『エイリアン』シリーズで観た、エイリアンの母体。

あの、おぞましい奴を思い出した。

(ケケッ、そんなことじゃねえかとおもったよ)  
負け惜しみではない。

その証拠に、麻暮は母体ロボット出現への対策もこうじていたのだから。

麻暮は足に取り付けた噴射ジェットのパタンを押した。

麻暮は空中に飛び上がり、母体ロボットの頭上までいった。

母体ロボットは大口を開けた。

その大口こそは、まさに巨大な腔であった。

(いやはや、恐れ入りました)

麻暮はつぶやく。

(ケケケ、ボクじゃなくとも、こんなもの見せられたんじゃ、セックス恐怖症になるぜ)

麻暮は、大口のなかに、特殊兵器から放たれた、多数のおたまじゃくし型爆弾をぶちこんだ。

三秒と経たずに、母体ロボットは雲散霧消した。

すると、セックスロボットの進撃も、そこで止まった。

だが麻暮は、手加減しなかった。

もはや進撃をやめた、おとなしいセックスロボットにも、おたまじゃくし型爆弾を放った。

墨田川の水は、一キロにわたって、セックスロボットの血に染まったのである。

二〇三二年、六月二十三日、午前十時。

郷田狂介は、書斎でネットニュースを見ている。

【墨田川がセックスロボットの死骸で埋まり、観光船も商業船もまったく動きが取れない】  
とあった。

麻暮正作の活躍も生死もなにもなかった。

(やはり、これがジャーナリズムの限界か)

それでも、大きな期待をしていない郷田に、失望感はなかった。

こんなもんだから、じぶんは書いているのだ、とあらためて自覚したものである。

麻暮の生死を心配する郷田は、麻暮とその師陽羅との、奇妙な関係を想い出した。

麻暮の片腕だった、小林金助に聞かされたものなので、いわゆる、

「また聞き」

であるから、真偽のほどは確証がないが、八割九割は真実だと思っている。

初めて師に出会ったとき、麻暮は十三歳、師は年齢不詳。

ふたりは、北は網走まで、南は奄美大島まで、全国を放浪しつづけた。

師は、麻暮を、

(天敵の如く)

扱ったと云う。

(貧困のなか、オニギリも林檎も半分ずつ食った)

とのことだから、天敵は云いすぎだろうと思ったが、聞いてみるとやっぱりそれは、師の教え方だったのだろうと思うほかはない。

いや、教え方ではなく、生き方。

なぜなら、師はいっさい、

(精神訓話らしき)

ものを語らなかつたと云うのだから。

ただ放浪生活のなかでの、ささいなやりとり。

たとえば師は、泥付き大根を食いながら、

「旨いか」

と聞く。

「まずい」

と答えると、

「なら食うな」

と、麻暮の大根を取り上げて、じぶんが食う。

たとえば師は、泥水の水たまりで行水をしながら、

「気持ちいいか」

と聞く。

「わるい」

と答えると、麻暮を水たまりから突き出す。

たとえば師は、泥まみれの衣類を縫いながら、

「この衣は温かいか」

と聞く、

「寒い」

と答えると、裸のままにさせたと言ふ。

麻暮が口をとんがらすと、師はただ一言、

「人間は泥だ」

とつぶやいたと言ふ。

郷田には何が何だか解らないが、こうした生活を数年つづけたなかで、麻暮は何かを掴んだのだろうと思う。

むかしから「管鮑の交り」と云われる。

そういうコトバを想い起こした。

ただ郷田には、麻暮のやり方に、まだ納得いかなないところがな  
いわけではなかった。

郷田は考える。

（麻暮さんのやり方は、荒野大人のやり方と、同じ次元だ。

それはヒットラーやボル・ポトや、あるいは信長がやったこと  
と紙一重ではないか。

もしセックスロボットが、ロボットではなく人間だったとして  
も、麻暮さんは皆殺しにしただろう。

電撃隊だって、けっきょく皆殺しにしたんだから。

じぶんも、敬愛するあまり、麻暮さんが乗りうつって、あれこ  
れやってきたけれども、それは正解だったのだろうか。

いまじぶんは、麻子ちゃんを預かることによって、麻暮さんに  
加担している。

はたして、それでいいのか。

川上宙門はどう考えているのだろうか。

ダイナマイトを発明したノーベルに、煩悶はあったのだろうか  
か）

「そうだ」

とちいさくつぶやき、郷田は、川上にメールを、いや電話をし  
てみようと思いついた。

「川上君、私です、郷田です」

「なぜか、電話がきそうな予感がありました」

「麻暮さんに、また新兵器を提供しませんでしたか」

「むろん、提供しましたよ。」

むろん、と云うのは、麻暮さんの行動に加担できることが、いまのじぶんの一番の悦びですから」

「悦び、悦びだって」

「ええ、世界に関わる悦びですよ」

「まあ、解らないでもないけど、それで荒野大人にも」

「ええ、荒野先生こそ世界を変える人物だと、信じていましたから」

「それが、いまは」

「ええ、世界を変えるやり方に、大きな疑問を持ちました。」

それで、荒野先生を裏切る形になりましたが、いまは麻暮先生のお手伝いすることに、大きな悦びを感じています」

「私も、以前は君と同じだったけれど」

「いまは麻暮先生のやり方に疑問を持っている、とか」

「そうじゃないんだ、そうじゃないんだ。」

麻暮さんは、私が最も敬愛する人物ですよ。

そうじゃないんだが、麻暮さんも荒野大人も、同じ次元にいる人に思われてならない。

世界に関わるなら、麻暮さんや荒野大人の次元ではなく、まったく異なる次元があるのではないかと」

「じつはぼくも、そう考えていた時期がありましたよ。」

お二人とも、ぼくたちの世界とは別次元の、そう、荒野に存在する人物だと」

「そうか、やっぱり川上君もそうか」

「そうなんですけど、郷田さん、よく考えてみてください。」

ぼくたちの世界って云いましたけど、それこそがいまや荒野なのではないかと。」

そしてその荒野に屹立する巨人が、あのお二人なのではないかと」

「むむむ、そうか、そうか。」

よく考えてみますよ」

「ええ、ぼくも」

「ところで、麻暮さんは無事なんだろうね」



「無事なら、郷田さんのところに帰るでしょう」

「つまり、帰っていないということは、無事ではないと」

「麻暮さんにはお伝えしたんですが、セックスロボットには、ま  
ちがいなく護衛の、コンボイロボットが付いていると。」

連中は、電撃隊とちがって、生身の人間ではないですから、退  
治も簡単ではありません」

「しかし君のことだから、そのコンボイロボット退治用の武器も、  
麻暮さんに渡してあるんだよね」

「それは当然そうなんですが、それにはリスクがともないます」

「リスク、リスクだって。」

せっかく生還した麻暮さんに、リスクを負わせるような武器を  
渡したのかい」

「ぼくを責めないでください。」

すべては麻暮さんの依頼なのでから」

「それはそうだろう、それは解っている。」

けれども、けれども、そうか、そうなんだ。

あの麻暮さんに、有能な科学者である川上君が付いているのが、  
マチガイの元なんだ」

「どういう意味でしょうか」

「頼むから、麻暮さんともう縁を切ってくれないか。」

君がいなければ、君の能力がなければ、麻暮さんはもはや死地  
になんか赴かなくてすむ」

「それは、それは郷田さんの願望にすぎません。」

たとえばぼくが縁を切っても、麻暮先生は、第二第三の川上宙門  
を見つけるでしょう」

「むむむ」

「ともかく時間をください。」

ぼくもぼくなりに考えます。

考えながらも、ぼくなりに、麻暮先生の無事を確かめますか  
ら」

「すまないね、私に云わせれば、麻暮さんは何よりも、この天使  
みたいな麻子ちゃんの父親なんだよ」

「解りました、ではまた、連絡します」

「よろしく頼みます」

二〇三二年、六月二十三日、正午。

川上宙門は、実験室で、フランスパンをかじりながら、壁面いっぽいの、巨大なテレビを観ている。

パリに行ってから、フランスパンが好物になった。

朝と昼はフランスパン、夜食はパートナーの岬美々が毎日手を変え品を変え作ってくれる。

フランスパンは、手でちぎって、チーズをはさんで食べるか、バターをぬって食べるが、今日は、チーズもバターもきれていたで、そのままだが、まず、なかみのやわらかいところをほじってたべ、それが済んだら、まわりのかたいところをコーヒーにひたしてたべる。

これは、麻暮流なのである。

テレビでは昼のニュースがはじまり、中継で、レインボーブリッジが映し出されている。

(あれはなんだ、あの音はなんだ)

川上は、思わず口の動きをとめた。

(音じゃない、あれは声だ)

それは、コンボイロボットたちの、掛声だった。

凄まじい掛声だった。

D

D

D

D

DEFENSE  
DEFENSE

スナワッチ

スナワッチ

D ○ ○ D D スナワッチ ○ ○ スナワッチ D D OFFENSE スナワッチ DEFENSE スナワッチ OFFENSE ○ ○ ○ ○

(よくわからん)

と思いつつも、アメリカの軍隊に似た、コンボイロボットたちの掛声、及び掛声に合わせた行進が、テレビ画面に映し出された。麻暮の姿はどこにも見えない。

セックスロボットが壊滅されたとしても、あれだけのコンボイロボットがいるのだから、麻暮が無事でいられるわけではない。それが川上の答だった。

(あの武器ではダメだったか)

川上は頭を抱えた。

(あの武器なら、千や二千のコンボイロボットはやつつけられるはず。

もしかすると、武器の問題ではなく、麻暮先生の体調に問題が生じたのかもしれない)

それはそれで大変だと、川上は自家用ヘリを飛ばして、レインボーブリッジへ行こうとした。

そのとき、郷田から電話がきた。

声が上ずっていた。

「麻暮さんが」

「やっぱり」

「帰ってきた。」

帰ってきたのはいいのだが、青息吐息で帰ってきたんだよ。

着いたとたんに、虫の息になって、意識不明」

「やっぱり、まだ病み上がりもいいとこですからね」

「その病み上がりに、武器なんか渡したのはだれだい」

「それはその」

「キノシタ博士を呼ぶのは無理だろうから、川上博士に頼むしかない。」

すぐに来て、救急処置をしてくれないか」

「もちろん行きますよ。」

ヘリに乗り込もうとしていたとこだし」

「心の臓が止まる前にきてくれよ」

「もし止まったら、AEDで対応してください」

「そんなもんじゃないよ」

「なら、マウスツーマウスで」

「麻暮さんとキスをしろというんだね」

「ぼくがやりたいけど、おまかせします」

「いや、キスするなら美々ちゃんがいい」

「はあ」

「美々ちゃんなら、覚醒する」

「わかりました、一緒に行きます」

電話を切った川上は、美々に連絡を入れた。

美々は即座に了解した。

二〇三二年、六月二十三日、午後一時。

川上宙門と岬美々は、郷田邸の応接間にいる。

麻暮の介抱をしているのだ。

邪魔をしないよう、また父親の断末魔を見せないよう、郷田は書斎で麻子を遊ばせている。

「どうかしら」

と美々が川上に聞く。

川上はあれこれ処置をつづけながら、

「キノシタ博士なら、問題ないと云うだろうが、僕の腕ではどんなものか」

「なにをいまさら、弱気なことを。」

あなたは、麻暮先生に武器を渡した時点で、こういう状況を想定しなければならなかったのよ」

美々に強く云われて川上はしよげる。

そこに追い打ちがかかった。

川上の携帯パソコンが緊急音を発したのである。

「どうしたの」

「コンボイロボットが襲ってくる」

「まさか」

「いま鶴沼海岸に向かっている」

「まさか」

「麻暮さんを狙っているんだ」

「セックスロボットの復讐なんだ」

「クソツタレ」

と云いつつ、美々は腹心のロボットである、タナカとナカタに連絡を入れ、コンボイロボットの鶴沼侵入を食い止めるよう命じた。

直後に、コンボイロボットたちの、掛声が遠くに聴こえ、それは凄まじさを加え、次第に近づいてきた。

D

D

D

D

DEFENSE

DEFENSE

スナワッチ

スナワッチ

○

○

○

○

過酷な轟音は、海を揺らし地を揺らし、郷田は、

○ ○ D D ○ ○ D D

スナワッチ

○ ○

スナワッチ

D D

O  
F  
F  
E  
N  
S  
E

スナワッチ

D  
E  
F  
E  
N  
S  
E

スナワッチ

O  
F  
F  
E  
N  
S  
E

O  
F  
F  
E  
N  
S  
E

(津波だ)

と思つて、とっさに麻子を屋根裏に運んだ。

川上は美々の言葉を怖れて緊張したが、美々の艶っぽい口から洩れたのは、

「タナカ、ナカタ、でかした」

というものだった。

美々の反応からの、川上の想定によると、現在は忠実な美々の腹心になっているタナカとナカタは、鶴沼の海岸に二台の強力速射砲を据え、大波とともに陸にあがってくるコンボイロボットを、一網打尽にすべき準備をすでに整えているはず。

いや、もう発射しているかもしれない。

なぜなら、例の掛声が微妙に変わってきたからだ。

あの、D、D、O、Oが、G、G、B、Bに聴こえるのだ。

そして、それも、聴こえなくなった。

「タナカ、ナカタ、でかした」

美々は叫んだ。

その声で、麻暮は目覚めた。

二〇三二年、六月二十三日、午後三時。

麻暮正作と麻子と郷田狂介は、郷田邸の応接間にいる。

岬美々と川上宙門は、すでに引き上げている。

「ともかくこれで一段落ですね。

お願いですから、あと三か月は静養してください。

川上君もそう云っていましたよ」

郷田が語りかけると、

「迷惑かけたからね、そうするよ」

麻暮は殊勝な声で云った。

それから、

「腹へった」

「僕もです、きっと麻子ちゃんもです。

特製の野菜スープを作りましょう」

「具沢山で」

「もちろん」



郷田はキッチンに向かう。

しばらくして、麻暮が声をかける。

麻子のベビーシッター兼、郷田さんのお手伝いさんを雇わんかね」

「要りません。

それに、そういう人がいても、どうせ、厄介なことに巻き込むだけですから」

「いや、少なくともしばらくは大丈夫。

と云うのは、ボクはこれからパリに行く」

「ゲッ、さっき、静養すると、約束を」

「だからさ、パリで静養するんだ。

ギャバン君も、マドレーヌもカトリヌも、もしかすると蝶子も、歓迎してくれるはず」

「そういうことなら、反対はできませんね。

ぼくからも、あの人たちによろしくとメッセージを送っておきますね。

ぼくにはお手伝いさんは不要ですが、麻暮さんの云う通り、麻子ちゃんにはベビーシッターを頼みますよ。

その方が、パパとしても安心でしょうからね」

「すまないがよろしく頼みます」

「いいとも」

と力強く云ったものの、三日後の麻暮の出発時には、烈しい後悔が押し寄せてくるのである。

二〇三二年、六月二十六日、午前十時。

麻暮、郷田、麻子、そしてベビーシッターは、成田空港の出発ロビーにいる。

まずベビーシッターのことを少々。

麻暮が美々に頼むと、女学生時代の先輩の女性を紹介してくれた。

美々らの学年の女学生は、みんなこの先輩に憧れていたと云う。

琴絵という名で、二十七歳、バツイチ。

夫は貧しいピアニストだったが、飛行機事故で亡くなった。

容姿について云うときりがないが、きりつめて云うなら、「昭和の香り」のする美人。

質素な服装に、楚々としたふるまい。

無口だが、眼と微笑みがモノを云っている。

同じ美人でも、蝶子とは正反対のイメージ。

同じ美人でも、美々とも正反対のイメージ。

ともかくも、麻暮は安堵し、麻子も琴絵みたいな大人になってほしいと思う。

さて、郷田と云えば、めちゃくちゃ心配している。

さっき、川上から郷田宛メールが届いていたのだ。

それによると。

【セックスロボットとコンボイロボット、さらにコマンドロボットを加えた十万体が、バリへ大進行。

麻暮やタナカ、ナカタにやられたものたちとは、別動隊】

すぐに郷田が、

【麻暮さんがこれからバリに向かう。

ロボット退治ではなく療養の予定だが、療養にはなるはずがない】

と送ると、川上からもすぐに、

【こんどは、そう簡単ではないでしょう。

私も、美々ちゃんに命じられ、バリへ向かいます。

早急にさらなる新兵器を作り、遠からずタナカ、ナカタと共に、プライベート・ジェットで向かいます】

郷田は、心配が三割減ったけれども、いまの麻暮には告げないことにした。

一日でも長く療養してもらいたかったからだ。

「郷田さん、顔色わるいね。」

ケケケ、美人のベビーシッターに惚れちまったかな」

何も知らない麻暮は冗談を云う。

「かんべんしてくださいよ、麻暮さん。」

オカマ卒業して、まだあんまり経っていないんですからね」

「ケケケ、作家たるもの、あんまりそう正直でもねえ。」

ボクなんか云われるのも厭だろが、親友として云わせてもらうなら、郷田さんからマジメのマジをとって、メだけにしてあ

げたいね。

そしたら、あんなに骨身削って書くこともないだろう」

「それは、ボクが麻暮さんにいつも云いたかったことですよ。

ボクは最近、荒野大人に、世界を滅ぼせるなら滅ぼしてみろと云いたい。

そして、こんな世界なら、一度滅んでもいいじゃないかと思うときもある。

それでも人間に生きる価値があるなら、かならず復活しますよ。日本が戦後の焼け野原から復活したみたいに」

「ケケケ、そこが、ボクと考えがちがうところだね。

たとえば日本は、幕末で大きな犠牲を払って、明治維新を打ち立てた。

けれども、江戸時代とくらべて、どれだけ良くなったというのか。

たとえば日本は、戦争で大きな犠牲を払って、戦後民主主義を打ち立てた。

けれども、戦前とくらべて、どれだけ良くなったというのか。

どんな犠牲を払っても、その犠牲に見合うだけの国にならないければ、犠牲を払う意味がないじゃないか。

世界中みんなそうさ。

ボクはいまここに生きている。

だからとにかく、ちっぼけな犠牲でもかんべんならないんだ」「ううむ」

と郷田は頭を抱えた。

(もしかすると、麻暮さんは、これから起こるバリの危機に、すでに気づいているのかもしれない)

それからおもむろに云うのだった。

「ちっぼけな犠牲をゆるさない麻暮さんが、ちっぼけな犠牲をゆるしているじゃありませんか。

ほら、麻子ちゃんを観てごらんさい。

パパとまた別れる悲しみに、声も出せないでいる。

麻暮さんにもしものことがあったら、みなしこになってしまわないですよ」

「ケケケ、郷田さん。

こどもは、ボクだけのこどもじゃない。

こどもは、世界のこどもですよ。

だから、郷田さんのこどもでもある」

「それは、それは詭弁でしょう。」

たとえ麻暮さんがそう信じていても、麻子ちゃんはその信じてはいませんよ」

「ううむ」

と、こんどは麻暮が唸った。

(たしかに郷田さんの意見に理がある。

けれども、そう信じてもしなければ、おのれをまっとうできないボクもいる)

時間がきた。

「ケケケ、いつだって時間は待っちゃあくれないな。

じゃあ、お元気で、よろしく」

「麻暮さんも、無理と無茶をしないで」

云っても無駄だと思ったが、そう云うほかはなかった。

二〇三二年、六月二十六日、午後一時半。

郷田と麻子と琴絵は、銀座のイタリアン・レストランにいる。

もうコトバを発することができる麻子が、スパゲッティを食べたいというので、ここに来たのだった。

「ぼくの作るスパよりおいしくないよ」

と郷田が云うと、琴絵はクスリと笑った。

オーダーし終わったとき、隣の席から声をかけられた。

「あんらまあ、郷田センセイじゃないの」

見ると、岬奈々が青年三人とテーブルを囲んでいる。

「これはこれは、おひさしぶりです。

おや、お子さんとご一緒ですか」

郷田は元お得意さんに愛想よく応じた。

「センセイったら、冗談がお上手。

彼らは、若いツバメその1その2その3、よ。

センセイのほうは、奥さまとお嬢さまと、仲良く」

「ちがいます」

と、郷田は即答したものの、自分の顔が赤くなっているのを覚  
った。

だが、本当にそう見られたとしたなら、わるい気分じゃないと  
感じました。

「否定なんかしたら、奥さまに失礼よねー」  
と、奈々は琴絵に笑顔を向けた。

琴絵は頬を赤らめただけで、何も云わなかった。

「そうだわそうだわ、ここで遇ったが百年目」

なんて大袈裟なコトバと身振りで云うと、奈々は自分の椅子を  
動かして、郷田の後ろにベッタリひっついた。

「な、な、なんでしよう」

「決まってるでしょ、依頼したいことがあるのよ」

「あの、探偵を辞めたって、ご通知も出したはずですが」

「そんなこと関係ないわよ。」

なせって、昔取った杵柄でいいんだもの」

「探偵を辞める理由も記したはずですが」

「でも、理由なんて表向きのことですもの」

「いえ、精神的な問題です」

郷田はいささかムキになっている。

まともに頼まれたら、断れそうにないのは、郷田がいまの境遇  
になれたのは、たぶん半分くらい奈々のおかげだから。

「探偵センセイのお仕事は、作家センセイのお仕事の、片手間で  
いいのよ」

「でも、そういうわけには」

「いくわよ。」

浮気調査に毛が生えた程度なんですもの」

「まあ、その程度の内容なら」

と応じたのがいけなかった。

奈々いわく、若いツバメらに奉仕ばかりしていないで、ぼちぼ  
ち美々に歴大な遺産を分けておきたいし、そのためには川上宙門  
との結婚も許したいし。

けれども、それにはちょいとネックがあって、宙門には女がい  
るらしい、しかもパリに。

ここをすっきりさせないと、結果的に宙門の女のために尽力し

たことになってしまおうし。

「この程度の依頼なので、あとはよろしくね」

云って奈々は席に戻って行った。

郷田は苦手なゴーヤを噛みつぶした顔になったが、つと思ひ直して、これはいい口実を与えてもらったのかもしれない。

パリに立った麻暮が心配だし、これからパリに立つ川上の支援もしたいと考えていた矢先の依頼である。

郷田はこんどは、大好きな桃にかぶりついた表情を作って、

「ねえ、琴絵さん、お願いがあるんですが」

「麻子ちゃんのことですよね。」

心配しないでパリに行ってくださいな」

二〇三二年、六月三十日、午後三時。

郷田と麻子と琴絵は、成田空港の出発ロビーにいる。

琴絵は小さな包みを郷田に手渡し、

「わたしの田舎で漬けた梅干しです」

「これはこれは、ありがたやありがたや」

おおげさに伏し戴いた郷田は、抱っこした麻子を琴絵に譲り、

「麻子ちゃん、パパを連れてすぐに帰ってくるからね」

「ウン」

「お姉ちゃんの云う事よく聞いて、お留守番していてね」

「ウン」

麻子の健気さにもらい泣きした琴絵は、

「無事のお帰りを祈っております」

「よろしく頼みます。」

祈ってもらえなければ、無事には帰れないかもしれないからね

「そんなことおっしゃらないで」

と、琴絵はまた泣いた。

飛行機事故で死んだ夫のことを想い出したのかもしれないと、

郷田はすまない気持になった。

「もちろん無事に帰ってきますよ。」

麻子ちゃんも琴絵さんも待っていてくれるんだから」

郷田が笑うと、ようやく琴絵も微笑んだ。

郷田は麻子のアタマに手をやり、

「お土産はエッフェル塔がいいかな。

おもちゃじゃなくて、本物のエッフェル塔ね」

二〇三二年、七月一日、午前十時。

ギャバンと蝶子は、パリ＝シャルル・ド・ゴール空港の到着ロビーにいる。

「遅いですね」

ギャバンは足踏みしている。

「落ち着きなさいな。」

飛行機がちょっと遅れているだけじゃないの」

蝶子は口調はきついが、顔は笑っている。

「そうですね。」

郷田さんとは久しぶりなので、待ち遠しくて」

「よっぽど郷田さんが好きなのね」

「麻暮さんは恩人、郷田さんは師匠。」

このお二人がいなければ、いまのぼくはありません」

「あら、ひとり忘れてやしない」

「モチロン、奥さんがいなければ、ぼくは生きてはいけません」

「よくできました」

蝶子はギャバンをハグした。

そのとき、郷田がやってきた。

「あらま、お熱いことで」

「郷田さん、いらっしやい」

蝶子がかんどは郷田にハグした。

「うーむ、パリは乱れとるな」

「さあ、とりあえずぼくの事務所に行きましょう」

ギャバンが郷田のキャリーバッグを持った。

「ホテルを予約しているんだが」

「それはキャンセルしてください。」

事務所の二階が郷田さん専用のお部屋です」

「麻暮さんは、いまどこに」

「麻暮先生は、マドレーヌとカトリーヌのマンションに」

「川上君とタナカ、ナカタは、もう来ているかい」

「まだのようです。」

「フライベート・ジェットが着いたら、連絡がくることになって  
います」

「無事に着くといいが」

「何か心配が」

「ああ、フライベート・ジェットなら、荒野も撃墜しやすい」

「世界壊滅をねらっている人が、旅客機と区別するでしょうか」

「それもそうだね」

だが郷田は、厳しい表情を崩さなかった。

二〇三二年、七月一日、午後一時。

郷田狂介は、「ギャバン探偵事務所」の二階で、仮眠をとって  
いる。

ホテルの部屋の十倍は快適で、それはギャバンの仕事が繁盛し  
ていることを想わせた。

仮眠をとりながら、ときどき薄目をあけてテレビの画面を観て  
いるのは、まだ川上のフライベート・ジェットの安否を気にして  
いるからだだった。

麻暮正作はマドレーヌの車で、これからこっちにくることにな  
っている。

郷田は眠るのも、テレビの画面を観るのをやめて、いったんす  
こし物思いに耽った。

著名な作家が、こんなことを云っていたっけ。

「日常生活を相手にして書くのが、小説というものであり文学な  
んだ。」

女房は、あいつをあんな目で見たが、おれは、女房とつきあっ  
ていたころだって、あんな目で見られたことなんか無い、とか。

友達は、きみに相談があって、家のそばまで行ったが、腹痛が  
きたのでしかたなく引き上げた、と云っていたけれど、それはホ  
ントなのか、とか。

兄弟は、あんたが入院したときは、三万円の見舞金を出したけ



れど、おれが入院したときは、どうして見舞金が一万円なんだと憤慨していた、とか」

（そいつは、のんきな時代の、のんきな文学さ）

と郷田は思う。

僕たちの日常は、いつからか、すでに、のんきな日常ではなくなっている。

たったいま、ミサイルが飛んでくるかもしれないし、もうすでに、ベストより怖ろしい感染症に罹っているかもしれないし。

いや、もっと日常に即してみても、僕がイクメンで奮闘しているいま、妻は乱交パーティーで奮闘している、とか。

友達は、僕に相談があるふりをして、僕の家を盗聴器を仕掛けて、僕の完全失脚を画策している、とか。

兄弟は、金欠病だと嘆いて、五百円の飯代をいつも僕に出させるが、その実、投資で何十億も稼いでいる、とか。

つまり、日常性のレベルが、数万倍にバージョン・アップしているのだ。

（もしかすると、のんきに小説なんか、書いている場合なのか）

そのときテレビで臨時ニュースが流れた。

フライベート・ジェットがセーヌ川に不時着した。

乗員は無事、とのこと。

郷田は安堵しつつ、セックスロボット、コンボイロボット、コマンドロボット十万体のニュースがないことを訝った。

ギャバンの声が、階下から聴こえた。

「麻暮先生が到着しました」

郷田は階段を駆け下りた。

二〇三二年、七月一日、午後二時。

麻暮正作、郷田狂介、そしてギャバンは、ギャバン探偵事務所の一階応接間にいる。

蝶子とマドレーヌは一緒に車で買い物に行った。

「さて、これからどうしましょうか」

郷田が何気なく云った。

「川上君とタナカ、ナカタは、WC病院のドゴール理事長に頼ん

でおいた。

三、四日は療養が必要だろう。

新兵器もちっと修繕が必要らしい」

「助っ人が足りませんね。」

パリ警察のセリーヌ警部と話をつけましょうか」

「ケケケ、彼は味方になる以上に、ボクらの障害になるだろう。」

つまり、パリでの闘争は、あらかじめ阻止するとね」

「立场上、それはそうでしょうね」

「そこで、髑髏仮面、岬裕次郎氏に声をかけた。」

だれよりもパリの裏社会に通じている」

「裏社会ですか」

「十万体がそのままパリを襲って来るとは考ええられん。」

そんなことしたら、セリーヌ警部が黙っちゃいけないだろうからね。

それに、湘南でのやり方の軌道修正もあるにちがいない。

地下道を利用するのか、それとも。

髑髏仮面なら、そこらの読みは完璧だ、ケケケ」

「しかし麻暮さん、パリのことはパリに。」

セリーヌ警部にまかせたらどうでしょうか」

「ケケッ、パリで大活躍した郷田さんとは思えぬお言葉。」

ボクは、ロボットたちと闘う意識じゃないんだ。

ボクは、荒野と闘うんだよ。

だから、世界中どこだって、その警察には任せられない」

「はあ、なるほど」

郷田は妙に感心しつつ、麻暮の幾つになっても変わらぬ執念をも感じた。

二〇三二年、七月一日、午後五時。

ギャバン探偵事務所の二階に、ギャバン、麻暮、郷田、そして岬裕次郎が集合している。

一階では蝶子とマドレーヌが夕食を作り始めている。

鉄仮面が髑髏仮面に尋ねる。

「荒野はどういう攻め方をしてくると思うかね」

髑髏仮面は躊躇なく答える。

「皆さんご存じと思われるが、フランス、いやパリには、おぞましい歴史が数え切れぬほどあります。」

もちろん、ナポレオンの時代やフランス革命前後は、まだ生々しい傷跡が残っていますが、それ以前でパリ市民が大いに気にしているのは二つ。

つまり、ヴァイキングの大軍の攻撃と、ペストの大流行です。

ペストでは市民の半分が死んだと伝えられていますが、ヴァイキングの怖ろしさもハンパではなかったらしい。

荒野は、この二つの恐怖をパリとパリ市民に味合わせるでしょう」

「どうやって」

ギャバンが不安げな眼を向けた。

「ヴァイキングの大軍は、セーヌ川をさかのぼって押し寄せてきました。」

だからロボットたちも、セーヌ川をさかのぼって押し寄せてくるでしょう。

そして、セックスロボットは、ペストやコロナ以上の感染を与えると喧伝するでしょう。

本来ならもうやってくる時期だけけど、幸か不幸か、川上さんのプライベート・ジェットがセーヌ川に不時着しました。

川上さんが新兵器を持参しているとの情報はすでに伝わっているでしょうし、事故処理で警察や自警団が屯していますから、それが鎮静化したときがその時でしょうね」

「うーむ、じつに説得力がありますね」

郷田が感心した。

「鎮静化したときは、川上さんもタナカもナカタも退院しているでしょうから、私たちと共に行動ができるでしょう」

「七人の侍ですね」

とギャバンが云ったが、

「二人は二体だから、正確には五人と二体の侍ですか」

と付け足した。

髑髏仮面は、溜息をひとつついてから、

「七人の侍でいいでしょう。」

あの映画では、四人が死んで、三人が生き残ります。私たちだって、オプチミックに考えてもそうなるでしょう」

「あれでは、野武士の大軍と戦うのに、農民たちも頑張っていましたよね。」

パリ市民は戦ってくれるでしょうか」

郷田が聞くと、髑髏仮面は、苦笑しつつ、

「少なくともいまのパリっ子は、いや昔から、戦うのが好きではありません。」

好きだったら、ナチスにやられたりはしませんよ。

それどころか、パリでもユダヤ人追放は盛んでした。

影響を受けやすく、くわえて物見遊山や見物が好きなんですよ。

だから、火あぶり処刑や、ギロチン処刑なんかを、芸術鑑賞と同じ感覚で観ていました。

ジャンヌ・ダルクもマリー・アントワネットも、いまから考えれば被害者ですよ。

それがいい見本で、いわゆる内ゲバ好きではありません。

カソリックのプロテスタントに対する残虐な迫害は、宗教家でさえ、そういうことの嗜好が顕著である証拠です」

「ケケ、なかなか手厳しいね」

鉄仮面麻暮がつぶやくと、髑髏仮面岬は、声音を変えずに、

「私もいまやパリっ子の一人ですから、これでも相当に遠慮気味に話しています。」

日本でも江戸時代などは凄まじい拷問があったといわれますが、パリの拷問はそれ以上でしょう。

パリっ子はシャレたかっこうでセンス良く歩き、クールな美しい横顔をしています。内実は、サドでマゾでナルシストでアブノーマルでキンキイです」

「ケケ、さらに手厳しいね」

「マドレーヌやカトリーヌには聞かせられませんね。」

おっと、ぼくもパリっ子でした」

ギャバンは赤面した。

麻暮はケケと笑ってから、

「いずれにしても市民はまきぞえにしたくはない。」

七人の侍だけで戦うことにしよう。

武器は川上君の新兵器と、以前ボクが使った旧兵器と、それ以前に使ったロボット用手榴弾と。

ほかに裕次郎さんが何か」

「はいはい、持参したのは、AI対抗薬品ですよ。」

「C病院のドゴール理事長みずからが開発したものです」

と、カプセルの詰まった瓶を取り出した。

薬大好きギャバンは、瓶のニオイを嗅ぐしぐさで、

「なんですか、これ」

「これを服用すると、いくらAIでも機能しない、というよりも、AIロボットにとって、透明人間に、完全無欠の透明人間になってしまふんです」

「つまり」

「そう、つまり、AIロボットにとっては、いわばベストに、見えない脅威、見えない敵になってしまうんですよ」

「そいつは凄い。」

でもボクは服まない。

ボクは、奴らの敵が、荒野の敵が、ボクであることを知らしめたいからね」

麻暮は云ってから、

「郷田さんはどうでしょう」

「ぼくも厭だな、感覚的に。」

タナカ、ナカタはどうでしょう」

「ロボットにはカプセルは無効です」

髑髏仮面のコトバに、郷田はすぐに反応した。

「なら、あなたがいい」

「私は消えても、この仮面が消えないから、ダメです」

「となると」

「ぼくしかいませんね、おまかせください。」

ぼくは、いまこそ、ジャン・ギャバンになります。

蝶子さんだって、ますます好きになってくれることうけあいです。

パリの英雄をパートナーに持った女性は、なんて幸せなんですよ」

ギャバンは嬉しそうで楽しそうだった。

鼻息も荒かった。

二〇三二年、七月三日、午前九時。

ギャバン探偵事務所に、〈七人の侍〉が集合している。  
麻暮正作、郷田狂介、岬裕次郎、ギャバン、川上宙斎、タナカ、  
ナカタ。

ギャバンはすでに、〈A I 対抗カプセル〉を服んでいる。

「どうだい、見えないかい」

川上がA I ロボットのナカタに聞く。

「マッタク、ミエマセン、オテアゲテス」

ナカタが両手をおおげさにひろげるので、みんな笑った。

「情報では、やはりセーヌ川をのぼって、パリ中心地に十時到着  
です」

川上が報告した。

「ケケ、七人の侍は要らんよ。」

川上、タナカ、ナカタ、そして透明人間ギャバンでOK。

もしかすると、ギャバンくんだけで片がつくかもしれんよ。

今回ボクは死んだふりをしているね」

郷田は内心微笑みながら、

(あんなこと云って、じぶんが真っ先に戦うくせに)

郷田は今度は苦笑をつくって、

「じつは、このぼくに、好きな女ができたんです。

いや、みなさん、笑ってはいけません。

ぼくのことですから、プラトニックではありませんが。

だから、ぼくは生きて日本に帰らなければいけない。

こんど紹介しますが、大和撫子です」

「郷田さんが好きな女性は、お花ですか」

ギャバンが冗談でなく云うので、麻暮は楽しそうに笑った。

「郷田さんの帰国は、ボクが命をかけて保証します。

なにしろ麻子のベビィシッターを悲しませて、なにかあっては、  
ボクだって困るからねえ」

「ありゃりゃ、麻暮さん、どうして知っているんですか」

「ケケ、麻子に問題ないか、念のため琴絵さんに連絡したところ、

いやはや、郷田さんを無事に帰してくれるよう泣きつかれてね。  
約束するから、ボクに万一のことがあったら、郷田さんと琴絵  
さんとで麻子を育ててほしいと、よく頼んでおいた」

郷田はひたすら赤面した。

二〇三二年、七月三日、午前十時。

ギャバンは、セーヌ川にかかるミラポー橋から、川上を視てい  
る。

セックスロボットとコンボイロボットとコマンドロボット、十  
万体が凄まじい勢いで押し寄せてくるのを。

前面に起ったコマンドロボットたちの、掛声がすでに近くに聴  
こえ、最大の活躍を自らに課したギャバンは、彼らに見えないは  
ずの五体を硬くした。

D

D

D

D

DEFENSE

DEFENSE

スナワッチ

スナワッチ

○

○

○

○ ○ D D ○ ○ D D スナワッチ ○ ○ スナワッチ D D OFFENSE OFFENSE スナワッチ DEFENSE スナワッチ OFFENSE



(なんだろう、この掛け声は)

麻暮から事前に聞かされてはいたが、じっさいに聴くそれはギヤパンを人生唯一で最大であるう、かぎりない不安感に陥れた。

思わず振り返ると、そこに川上とタナカ、ナカタがいた。

そして左右の川端には、鉄仮面と髑髏仮面が立っていた。

郷田は、麻暮の指示で、パリ警察のセリーヌ警部のもとへ車を飛ばしていた。

すでにセリーヌには、麻暮から電話で通達はしてあったのだが、事件が勃発しなければ動かないのは、どの国の警察も同じ事である。

タナカとナカタは、川上が開発した新兵器を、さっそく使い始める。

前面に起つコマンドロボットたちの、掛け声が叫び声に変わる。次から次へと破壊され、なんとか新兵器をかくくってきたコマンドロボットたちは、透明人間ギヤパンによって、風潰しに潰されている。

ミラボー橋周辺は、さながら戦闘ゲーム状態。

もう何を叫んでも聴こえないので、お互いひたすら撃ちまくるだけ。

野次馬も昼の花火でも観る様子で、大口を開けて見上げたり見下げたり。

戦場はすでに数万のコマンドロボットの死骸に満ち、セックスロボットたちは嬌声をあげ、人間の男を求めて上陸しきょうとする。

それをコンボイロボットたちが体を張って守っている。

セーヌ川の左右の川端から、鉄仮面と髑髏仮面が飛び立ち、頭上からコンボイロボットの頭を攻撃する。

コンボイロボットの頭は次々と胴体から離れ、飛翔し、それぞれどこやらに落下する。

女王格のセックスロボットの股間を目がけて、川上が新兵器を発射させると、タナカとナカタもそれを合図に烈しく攻撃開始。

セックスロボットたちは、股間に衝撃を受けて、エクスタシーの嬌声と共に、コッパみじんに粉碎される。

コンボイロボットたちは怒声をあげ、体をハリネズミに変身させ川上たちに襲い掛かる。

破壊しても破壊しても、いくらでも湧き上がってくるロボットたちに対して、エネルギーを失いつつあるタナカとナカタから溜息が洩れはじめた。

(これはまずい)

と川上が思う間もなく、無数の鋭い刃を持つハリネズミに襲われ、タナカが破壊され、すぐにナカタも破壊される。

だが、二体は破壊する前に新兵器を川上の元へ飛ばす。

川上は、その二つの新兵器を鉄仮面と髑髏仮面に渡すべく動いたが、ハリネズミに吹き飛ばされる。

透明人間ギャバンが、血まみれになった川上を安全な場所に移し、新兵器を鉄仮面と髑髏仮面に渡す。

鉄仮面と髑髏仮面は、風神雷神の勢いで、ロボットたちを破壊しまくる。

もはや、コンボイもコマンドもセックスも無差別で。

このとき、ロボットたちは最後のパワーを発揮し、コンボイとコマンドとセックスが合体、見るも巨大で見るもおぞましく見るも神々しく見るも醜悪なガンダムに、いやガンダムの百倍は巨大なパワーロボットが屹立する。

すると、やつに挑んだ髑髏仮面が、自爆テロを敢行、髑髏仮面が爆発すると同時に、やつも爆発する。

その火の塊はパリの全市中に飛翔する。

(まずい)

と麻暮が叫んだとき、パリ全市中に、警察車のサイレンと消防車のサイレンと救急車のサイレンとが、パリの歴史上かつてなかったほどの、けたたましさで鳴り響く。

(おう、郷田さん、間に合ったか)

セリーヌの車が、半分崩れかかったミラポー橋に到着すると、郷田が飛び出してきて、ギャバンと共に血まみれの川上を救急車に運ぶ。

もはや勢いのなくなりかけたロボットたちを、麻暮は残らず殲滅してから、セリーヌのところに行く。

「ケケケ、さすがはパリ警察、タイミングがいい。」

今回も後始末は頼むぜ」

セリーヌは不快そうにヒゲをバクバクさせ、

「麻暮さん、また、パリをめちゃくちゃにするために、ようこそ」

「ケケケ、ようこそはよかったね。」

ボクはもう帰国するよ」

ギャバンがやってきて、

「麻暮先生、やっぱり七人の侍、四人がやられましたね」

「いや、川上君は蘇生するにちがいない。」

でなければ、タナカ、ナカタを復活させられないからね」

「岬裕次郎さんは」

「罫髭仮面は、死に場所を探していたから、本望だろう。」

だが、荒野めが次の手を打ってくるにちがいないから、新たな罫髭仮面が誕生するはずさ」